

浄

monthly
JŌDO

土
6

Jun 2002



法然上人鑽仰会

ブロードバンドは、サービス品質で選ぶ。

世界をつなぐ 未来につなぐ
日本テレコム

ODNのADSLは最大1.5Mbpsの
超高速インターネット

*回線速度は、あくまでも理想値で保証されるものではありません。
また、提供局からの距離などの要因により変化することもあります。

コンテンツも充実

ODNの「ブロードバンドチャンネル」は、音楽・スポーツ・
エンターテインメントドラマ、料理など幅広い内容が盛り込まれています。

さらに大幅値下げ!
2,880円/月
24時間
常時接続

◎初期費用6,000円～
◎モデムレンタルの場合 500円/月
※NTT東日本・西日本の回線使用料として100円/月(タイプ1)が別途必要です。
※記載の価格は消費税別
(平成13年10月現在)

サービス
提供エリア
拡 大 中

札幌・仙台・東京・立川・
国分寺・武蔵野三連・千葉
市川・川崎・横浜・浦和・
川口・名古屋・京都・大阪
茨木・藤原川・八尾・岸和
田貝塚・堺・和泉・神戸
北九州(平成13年8月10日現在)

*上記のエリアであっても、ご提供できない場合があります。詳しくはホームページ、またはテレホンサービスでご確認ください。

【提供エリア案内センターサービス】

☎0088-222-357

【提供エリア検索ホームページ】

<http://www.odn.jp/jp/odn/>

ODNフレッツADSLプランもあります。

大幅値下げ

日本全国
エリア拡大中

無料サポート
365日

安心の
回線システム



初心者でも安心の
サポートサービス

お問い合わせ (ODNサポートセンター J-DSL担当デスク)
お申し込み (受付時間) 9:00～18:00 (年中無休)

☎0088-222-375

日本テレコム
ならではの
保守管理体制

インターネットは日本テレコム

ODN
Open Data Network

ODNのADSL
J-DSL
パーソナル

浄土

2002/6月号 目次

特集・聖徳太子

聖徳太子の和	立松和平	2
聖徳太子“和”の心	龍藤尊教	10
表紙の言葉	鈴木奈緒	19
一粒の米に感謝を	三島昭男	20
連載		
民話をたずねて	石崎敬子	26
響流十方	小村正孝	34
食と健康	長田英樹	40
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし	47
編集後記		48



表紙題字＝浄土門主 中村康隆殿下
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

特集

聖徳太子

こんな時代だからこそ、我々は「和」の心を確認しておきたいのだ。「和」といえばやはり聖徳太子。今、だからこそ「聖徳太子の和」

編集部

聖徳太子の

和

作家

立松和平

聖德太子が生まれたのは敏達三（五七四）年で、父は橘豊日皇子^{たちばなのとよひのみこ}、後の用明天皇^{ようめい}である。母は蘇我稲目^{そがいなめ}の娘小姉君^{おあねぎみ}の子、穴穗部間人皇女^{あなほべはしひとみめ}である。欽明天皇^{きんめい}の妃のうち、堅塩媛^{きたしひめ}と小姉君は蘇我稲目の娘で、堅塩媛からは用明天皇と豊御食炊屋姫^{とよみけくひめ}が生まれている。豊御食炊屋姫は料理の上手なお姫さまというような意味で、敏達天皇の皇后になり、後女帝推古天皇として即位する。聖德太子は推古天皇の皇太子として摂政の役目をし、現実の政治をおこなった。また小姉君からは崇峻天皇が生まれている。聖德太子は天皇家の人であるが、蘇我氏の血も色濃く持っている。母が違う異母兄弟であってみれば結婚もしたという、まことに血が入り組んだ時代である。

この時代、人々は憎悪を持ち、戦乱に明け暮れた。一つの価値が中心に置かれるのではなく、流動する価値観の中で、人々は翻弄^{ほんろう}されていた。技術革新がめまぐるしく、一つの技術が価値観をまったく変えてしまう今の時代と似ているかもしれない。

中国の清新なる文化が、百済や新羅や高句麗など韓半島経由で着々ともたらされ、それを受容するかどうかで社会は二つに割れ、ここでも激しい憎悪が湧き起こったりした。蘇我氏は新しい文化を受容しようとし、「となりのくにのかみ」（『日本書紀』）の教えである仏教をこの国に持ち込もうとした。仏教には渡来人たちの先進的な文化が付随して

いた。一方、物部氏もののべは日本古来よりの神々を信仰し、ことごとく蘇我氏と対立した。
あまのつみよりのみかみ
天照大神からつづいた天皇家は、日本古来の神々の神託により王権をいただいたのだが、

そのこととまったく関係のない世界宗教である仏教が日本にはいつてきて、社会には激しい対立が起こっていた。根底には権力抗争があり、蘇我氏と物部氏はとうとう武力抗争に突入した。『日本書紀』には、厩戸皇子うまじのみこと呼ばれていた聖徳太子が、戦争に積極的に参加していったことが記載されている。

私の意識によると、その部分はこのように記されている。

厩戸皇子は、額で髪を束ね、軍のあとに従っていました。そしてこう思ったのです。もしかするとこの戦は負けるのではないか。願をかけなければ勝利は得がたいと思い、ヌルデの木を切り取って急いで四天王の像を作って髪に挿さしました。今自分を敵に勝たせたなら、必ず四天王のために寺を建立します。という誓願を立てたのです。蘇我馬子も願を立てて、自分を助けて戦に勝たせてくれれば、諸天や四天王のために寺を建てて三宝を広めますと祈りました。

厩戸皇子は十四歳でありながら積極的に戦いに参加し、勝利を得ることができた。その誓願のとおり、厩戸皇子は摂津国（今の大阪）に四天王寺を建てた。こうして仏教は正式に受容されるようになったが、それでは敵の物部氏が信奉した古い神道は一挙に捨てられることになったのだろうか。もし神道が破棄されたのでは、これまで神道によって祀られてきた祖先の霊は、これから後にどのように祀ったらよいのかわからなくなってしまうではないか。祖先が迷ってしまったら困るのである。これは自分たちもやがて行き場をなくしてしまうことを意味する。

激しい戦争が行われたにもかかわらず、古いものを破棄し切ったのではない。和の精神により、古いものも新しいものもどちらも生きられる道を求めたのである。

私は毎年正月に法隆寺に参籠し、金堂修正会に小坊主として参加する。七日間行われる金堂修正会が結願けつがんに近くなった時、暗い伽藍の裏に行列をつくって、五社明神、または総社明神と呼ばれている社にお参りする行いがある。三間ばかりの春日造りの社殿には、武甕槌命たけみかづちのみこと（常陸国鹿島神宮）、経津主命ふつぬしのみこと（下総国香取神宮）、天児屋根命あまのこやねのみこと（河内国牧岡神社）、比売神ひめのかみが祀られている。その神々にお参りにいくのは、自分たちはこのように法隆寺の大伽藍をお守りしていますよということを、表白文を読んで報告するというこ

とである。日本の多くの仏寺は、根底に神社をお祀りしている。寺の根つこのところには、神社がある。神仏習合ということだが、激しい対立関係にある両者の対立を解き、どちらも生かすには、まことに得がたい道なのではないだろうか。

仏教がようやく人々の間に根づきはじめた古代に、このように和の精神が重んじられたということを、私たちはもつと誇つてよいのではないかと私は思う。聖徳太子がはじめた政策かどうかはわからないのだが、戦いに倦んだ人々の精神には、和こそ尊いのだと感じられたのであろう。

崇峻天皇は蘇我馬子によつて暗殺され、推古天皇が即位する。二十歳の聖徳太子は摂政となり、現実の政治にたずさわる。四十九歳まで摂政をしていたが、聖徳太子が激しい政治状況の中で積極的に仕事をしたのは、二十代後半から三十代後半の十年間ぐらいだといわれている。この間、韓半島では新羅との戦争があり、中国には遣隋使を送る。それまで土俗的な豪族による支配だったのを、位によつて十二の衣の色を決めて冠位十二階を定め、官僚制度を整備した。十七条憲法を定めた。摂政の仕事を猛烈にこなした十年の後、太子は斑鳩宮の夢殿の中に籠もつて静かに瞑想をしたり、著作をしたりという生活をしたようである。

和の精神は、十七条憲法に見事にいい表わされている。十七条憲法の全文は『日本書紀』に載っていて、推古十二（六〇四）年四月三日に、太子自身が書いたとされている。最初の一句は誰でも知っているであろう。

一に曰く、和を以て貴しとなし、忤うことなきを宗とせよ。人みな党あり。まさ達れる者少なし。ここをもつて、あるいは君父に順わず。また隣里に違う。しかれども、上和下睦びて、事を論うに諧うときは、事理おのずから通ず。何事か成らざらん。

和ということが貴いのであつて、やたらに反抗することないようにすべきである。人にはみな党派心がある。物事の道理を見通しているものは少ない。そのために主君や父に従わず、近隣の人々と争うことになる。しかしながら、上が和らぎ、下が睦むならば、事柄は道理にかない、成しとげられないということはない。

このような意味である。和というのは、もちろん単なる従順ではない。事を論ぜず、長きに卷かれるという事なかれではなく、議論をつくすうちに、人々すべてが納得できる調和というものが生まれる。この調和の道こそが、和なのである。戦乱に苦しんで生

きてきた聖徳太子の、仏教によってつかんだ理想が、ここに語られている。

だが実際には、この調和はそれほど簡単な道であるはずがない。仏教でいえば、どこから真ん中の道、中庸ちゆうようということである。

二つのものの対立を離れる道は、中道ちゅうどうである。断と常の二見、あるいは有と無の二辺を離れ、どちらかにかたよらず、中正なる道ということだが、現実にはその道をいくのはまことに困難だ。そもそも原始仏教においては、極端な苦行と極端な快楽を排したことであつて、釈尊のさとりはそこに根ざしたのだ。しかしながら、対立抗争ばかりでできたこの世で、どちらかに少しでもかたよるということは、一方を敵とすることを意味する。和とは、なんとも困難な道なのである。だが太子が不可能だとはいっていないところに、仏教の神髄があると私には思われる。

どこからも真ん中の場所を得ることは不可能かもしれないが、その場所をめざすことはできる。自分だけが正しいのだと頑なに思い込んだり、自分の意見は間違ひなく正しいのだから他のものは従うべきだと強引な思想を展開することからは、最も遠い。相手

のことを氣遣い、寛容の心を持つことが、まず基本なのである。

いつも心は柔軟で、人の意見には気持ちよく耳を傾けなければならない。「和を以って貴しとなす」とは、寛容の精神である。違いというものを認めれば、他人の力によって自分も変わることができる。同じことが相手にもいえ、お互いにならなければ、どこかで調和する一点を見つけることができるはずである。現象とは因と縁とによってできるのだから、その時その場の条件である縁が変わっていく以上、私たちの身のまわりにはたえず力学が働いて動いていく。こう考えていくと、必ず調和の一点を見つけることができるはずだ。

聖徳太子のいう「和を以って貴しとなす」の根本には、たえず変わっていく人間は、その変わり方を見据えていけば必ず和合に至り、すなわち人間は根源的に信ずるに足るという性善説があるのだ。苦しい時代を生きた聖徳太子の性善説は、人間存在の闇まで見詰めてきた果ての明るさであるからこそ、時代を超えて輝いているのである。

聖徳太子の

和の

心

和宗総本山四天王寺前管長

瀧藤尊教

聖德太子の説かれた国家理念は「一大乗」の精神であり、その実践徳目として御示しになったのが、「和」の聖訓であります。それは太子の御製、御註釈の「三経義疏」の中に哲学的根拠が述べられてあり、十七条憲法の第一条に「和を以て貴しと為せ」と御示しになっておられます。これらの御聖訓を通じて、「和の心」を推測させていただきます。

まず、その根幹の「一大乗」ですが、「一」とは「多」をして「多」たらしめている根元の「一」であります。例えば、水波の相を眺めるとき、千波万波は一なる水によつて形成されております。大海の波も、その波を波たらしめておるものは水であります。大小を論ぜず波は勿論、H₂Oであり、その波は同一のH₂Oの水によつて生滅いたしております。千波、万波の生滅は、水の変化に過ぎません。ゲートの『ファウスト』の詩によると「遠く近く、近く遠く、大は小に、小は大に、各々その相を示現する」と述べております。

この営みを天地万物に当てはめて眺めますと、空飛ぶ鳥も、地をかける獣も、木も草も、人々も、すべて現象界の姿は、いわば波を見ているようなものであります。天地、万物を、現象としての波と見るとき、その波を波たらしめている水の存在、この「一なる世界」

を聖徳太子は「常住真実」と呼ばれ、この「常住真実へ帰依すること」が人間の考えの根本でなければならぬ」と教えておられます。この世のすべての万物はこの大宇宙の中の一つ一つの波であり、この波を波たらしめているものが「一」なるものであり、この「一」なるものに目覚めよと説かれております。再び、ゲーテの『ファウスト』の辞を引用しますと、「あらゆるものは一つの世界から成り立っている。一つ一つが互いに助け合って輝いている」と申せるのであります。この裏付けとして、太子の『維摩経義疏』の言葉を拝しますと、

「夫れ至聖を論ずれば、智、真如の理に冥して永く名相の域を断つ。此れもなく彼もなく取もなく捨もなく。既に太虚をもつて体となし、万法を照らすを心となす」と述べられ、「形も姿も、ことばで言い表わせない広大な、虚空のように、表現の世界を絶した『至聖』が一切の存在を照らし、すべての存在を救い生かしている大いなるもの」と述べておられます。これが即ち、或いは神と呼ばれ、仏と呼ばれ、法性と言われ、根本生命ともいわれ、宇宙の根本生命とも言われる目に見えぬ力をさしております。

さくらの花びらのすべてを

灰^ほかな うすピンクに染めたのは

誰^{たれ}だろう

さくらの花びら一枚一枚に

小さな切り込みを入れたのは

誰^{たれ}だろう

と詠じた、芦田宏子さんの詩の主でもあります。（産経新聞・朝の詩より）

また、

“青いお空の底ふかく

海の小石のそのように

夜がくるまで沈んでる

昼のお星は眼にみえぬ

見えぬけれどもあるんだよ

見えぬものでもあるんだよ”

金子みすゞの詩

この世の現象は「生成」「発展」「凋落」「死滅」という変化を示しますが、あくまでこれは、波の如き現象面であり、いのちそのものは、水のごとく常住不変であります。地に落ちた木の実が、新しい木となる如く、朽ちた木の葉が、土となってさらに他の木の中に

吸収されて新たな生命を得ることく、死を示した有機体も新しい生命へ連続するのであって、常に永遠の生命の中の変化に過ぎないのであります。

私達人間も、世界六十億の人類は、顔も姿も悉く異なりつつ、その機能の働きは、全く同じであります。

肉体は変化し、死へ旅立ちますが、その生命は輪廻し転生いたします。業（カルマ）がその継承を司ります。臨死体験、前世療法、霊界探訪（霊能者の手記スウェーデンボルグ）等の報告記や、祖師先徳の遺言や、霊媒現象等により、輪廻に対する是認者も、アメリカでも七十パーセントを越えるという報告がなされているようであります。

聖徳太子は、『法華経義疏』を通じ、寿命長遠の精神を、その要諦としてお述べになりました。私達はすべて法性、いいかえれば、宇宙生命の現れであります。従って、人類悉く兄弟であり同朋であります。互いに敬愛し、助け合い、己を愛することく他を愛することが、真の理法にかなうものであります。一波が多波に、多波が一波に会通し、共流することく、人類すべてが、共流し、会通しつつその生を営んでおるのであります。従って、一滴の色素が、周辺の

水に影響を及ぼすごとく、一人の営みが直ちに全体の営みに「反応する兄弟、同胞の關係が、私達の人生であると申さねばなりません。従つて互いに敬愛し合い、助け合い、己を愛することく他を愛することが、真の理法にかなうものであり、この心が存することによつて「和」の世界が、成立するのであります。

この和の理念を太子は「十七条憲法」の一条二条によつて詳説されました。

一条の「和を以て貴しと為し」に於て、「和」を妨げる心として「人皆^{衆人}党あり」と述べ、人間本性の禍根を「無明」と指摘されました。即ち、先述の同胞自覚を悟らず、エゴに基づく迷妄心を、和の妨害心と指摘しておられます。その迷妄を消失せしめる道を、『勝鬘經義疏』によつてお述べになりました。「生死は即ち是れ顛倒なり、如来藏は是れ真実なり……」の御解釈に基きますと、人生は無常で、虚偽顛倒、迷妄の営みであるが、その人生も実は隠された「如来藏」に支えられているのであつて、如来藏は總ての人が宿し具えているのである。ただ月が雲に覆われてその光が遮られている。その雲が払拭された時は、光が輝くように人々の心が輝くのである。すべての人は、この如来藏に支えられ、導かれて無上の悟りに到達

※註

党は「無明」という意味をもっている。金治男博士の解釈による。

できるのである、という信念をお述べているのであります。然し、その為には憲法第二条の「篤く三宝を敬え」と示されるのであります。即ち、仏・法・僧を敬うことにより、この如来蔵に目醒めるのであります。この三宝はもとより、狭義には仏教を敬え、ということになります。が、仏は「悟れるもの」で悟道に達した聖者であれば、すべて「仏」と考えられます。「法」は「真理」であります。「僧」はその教えを敬う人々の集いであり、従って広義に解釈すれば、「神仏を信じて敬う心」が大切であるとなります。太子の御信念は「帰依渴仰」の精神であり、人間教育の根本、万善の基は「帰依渴仰」であると教えておられます。この「帰依渴仰」の心は、「人類の指標・人道の直道」とまで宣言なされているのであります。

「行善の義は、本と帰依に在り、今広く万行の道を明さんと欲す。故に帰依を以て首めとなすなり」或いは「善は即ち乃至一たび南無と称するも、是れ善に非ずといふことなし」とお述べにもなっているであります。

夜久正雄先生は、『勝鬘經義疏の現代語訳と研究』（大明堂）で次の如く太子の精神を述べておられます。

勝鬘も仏も如来蔵の存在を「定め難い」と言われるのでは衆生はどのように信じてよいのかわからない。そこで、仏はそれに答えて「心から信じる人がいるのであるから、その人にならうて信じて疑うな、と勧める」と太子は解釈なさったのです。此れを読んですぐ心に浮かんだのは、親鸞の言葉であります……よき人の仰せをかふむりて、信ずる外に、別の子細なきなり……（歎異抄）太子は「敬慕する人」の全人格を信仰の拠りどころとされたのであります。

また、梅原猛先生は『聖徳太子』（小学館）の中で、自性清浄心（如来蔵）が煩惱のためにけがれているという思想を理解することは、むずかしい。またこの煩惱のなかに悟りの心が隠れていることを理解するのはむずかしい。このパラドックスをいっただうしたらよいのか、たしかにそれはパラドックスであるが、しかしそのパラドックスを信ずるか、信じないかに真の仏教者であるか、どうかがかかっている、と太子はいうのである。そして太子は、このようなパラドックスを信ずる人を眞子まことした。……このパラドックスから日本の仏教は生れたと述べ、最澄の大乗戒、空海の即身成仏、法然は深いけがれの中にある人間は、南無阿弥陀仏と念仏を唱えることによって救われると説き、親鸞は、肉食妻帯しつつ、念仏を唱え

れば極楽浄土に生れることが出来るとした。これらはすべて、『勝鬘經義疏』で太子が明らかにした。太子は遠く未来を思惟している聖者であつたように思われると述べておられるのであります。

「二枚起請文」に法然上人が、お示しになつた「南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞとおもひとりて、申すほかには別の子細候はず……」の中にこの信仰の妙諦が見事に結集されているのであります。

以上の御思想を通じ、聖徳太子の「和」は、単に今日の平等主義の如き和ではありません。義務教育に於ける通知簿が、殆ど差のない相対的評価で示されたり、運動会の競争も等級を避けたり、教壇を除き、卒業式を生徒主宰にせよと煽動したり、夫婦別姓を法制化したりといった主張は、太子の「和」とは全く次元が違うのであります。

人類悉く、同一生命の顕現としての自覚、真に同胞としての自覚に基づく一体感に住した共生は、共に透徹した一如的な浄土観に徹し世界人類が共生の楽土を謳歌できる日を祈念致さずには居れません。

6月

◆表紙の言葉◆

能素描

八島
やし
ま

これは世阿弥作の二場の修羅能、讃岐、屋島での凜然とした源義経を物語る。

修羅能とは、この世で戦をした者が死後に落ちる修羅道の苦しみを仏教により救われようと、迷い出て昔語りをする構成の曲で、ほとんどは平家方の武将の敗戦の苦しみが語られるが、この八島という能は勝いくさの義経の、明るく^{はつらつ}澁刺とした戦いが語られる。

都の僧が四国屋島の浦に着き、浜の塩屋で主を待っていると、やがて漁翁が若い漁夫とともに帰って来る。旅僧が往時の古戦場に於いての有様を尋ねると、漁翁は義経の颯爽たる戦いふりと、三保谷と^{みおのや}景清が^{しんろ}鍾引きをしたこと、佐藤嗣信が義経の馬前に立ちふさがって教経の弓にたおれたことなどを語る。僧はあまりくわしい物語りに翁の名を尋ねると、義経の霊であることをほのめかして、消え失せる。

やがてまどろむ旅僧の前にありし日の凜々しい甲冑姿の義経が現れ、この屋島での合戦のさまを語り、激しく戦う様子を示すが、朝風とともに消えたかと思うまに、僧の夢も覚める。

表紙画と文

鈴木奈緒

プロフィール 1947年 三岸節子先生に師事
1950年 女流画家協会展 H婦人賞受賞
1983年 秋耕会展 女流会長賞受賞
1994年 秋耕会展 文部大臣賞受賞
個展23回開催

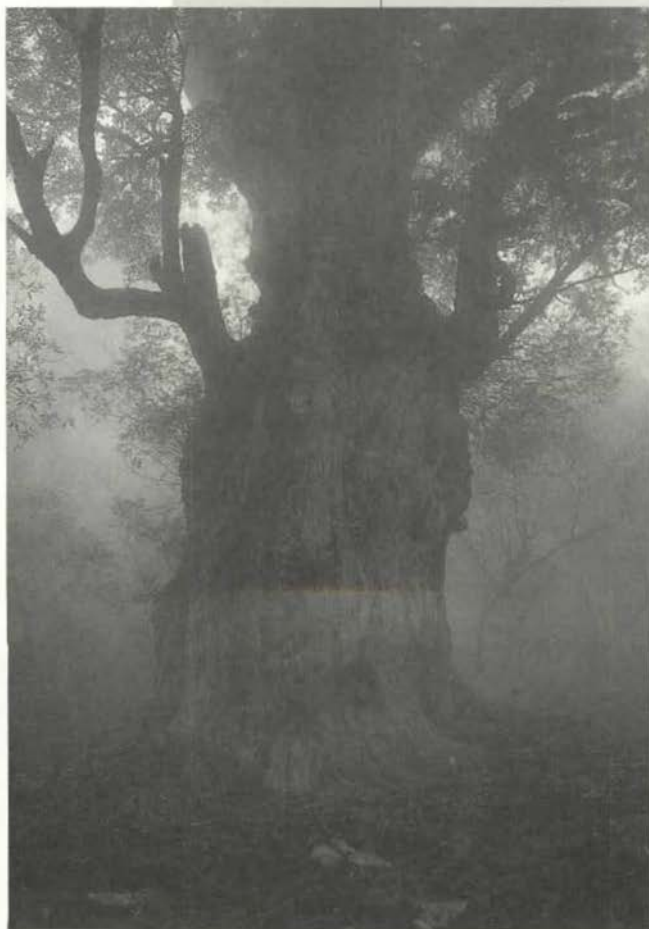
一粒の 米に 感謝を

めざせ救国の
自然敬愛運動

環境警世家
元朝日新聞編集委員

三島昭男

莊嚴な霧の中に「兩腕」を広げ
屹立するかつての縄文杉の雄姿
(現在は「左腕」が枯れ落ちて
いる)



私たち人間は何のおかげで生きていられるのか。私たちが生きていけるのは、この地球に生を受けた、他の生物を犠牲にしているからである。動物や植物や魚貝……地球上にうまく息づく生きとし生けるもの全てが、同じように尊い生命を大自然から授かり、その無数の尊い生命が、人間の一生を支えてくれているのである。

たとえば一粒のお米。陽光と大気と水と土に育まれた大自然のエネルギーが、小さな一粒に凝縮し、春の一粒が秋には二千粒にもなるという驚くべき生命力。その一粒の強靱な生命を頂いて、私たちは生かされているのである。瑞徳国の民である日本人が、古来からの習わしとして、食前食後に「頂きます」「頂きました」と合掌し、一粒のご飯も粗末にしなかったゆえんである。めし茶碗に一粒でも残そうものなら、親から「罰が当たるぞ」と、嘆られたものである。

残飯一千万トン捨てる

しかし、その美風は廃れ、世界の飢餓人口八億人をよそに、残飯の生ゴミを一千万トンも捨てている「飽食大国」日本。一千万トンといえば米の収穫量とほぼ同じである。飽食の民は栄養・脂肪の摂りすぎから心身とも深く蝕まれ、成人病が蔓延している。テレビはあきもせず早食い大食い競争の愚を演じ、まねをした中学生がパンをのどに詰まらせて死亡する事件が起きた。(4月27日付朝日新聞)

美食をあさるグルメ番組は目白押しで、食糧自給率が先進国最低の四〇パーセントとは信じられない「グルメ天国」だ。グルメブームに浮かれておれるのも、金にもものを言わせて一千万トンもの食料品を輸入しているからなのだ。そして食べきれずに、一千万トンもの残飯を捨てている。こんなに食べ物を粗末にしているのは、世界中でわが「グルメ族」だけである。グルメを私流に漢字で表

わせば「愚流奴」。金儲けの美食宣伝に愚かに流される奴があまりにも多すぎる。地球環境の悪化が深まるなかで、ひとたび世界的な食糧危機が襲えば、輸入の糧道を断たれた「愚流奴天国」は一転、飢餓地獄に落ちるのは、火を見るよりも明らかであろう。自然の掟を破った傲慢な「愚流奴」に必ず天罰が下るだろう。

かつて栄華を誇った強大なローマ帝国が滅亡したのは、現世ふうによれば、国民総グルメとなり、前線の兵士たちまでが美食におぼれて墮落、心身ともに軟弱になったために、北方から攻め込んだ屈強なゲルマン民族に滅ぼされたのである。当時、上流家庭の食堂の隣には、食べすぎた料理を吐き出すための嘔吐室が特別に設けられていたという。ごちそうで満腹すると吐き出し、もっと旨い物をと詰め込む。そしてまた吐き出す……。ローマは一日にして成らず、と言うが、その驕れる帝国は、内なる敵愚流奴によって、あつとい

う間に滅びてしまったのである。ぜいたく三昧の愚流奴は、亡国の徒にして、今や地球の敵なのである。

飽食大国にやがて「天罰」

次代を担う子供たちに「食べ物の有難さ」や「もったいない」と思う心を持たせようとしても、愚流奴番組がぶちこわしてしまふ。この有様で、どうして未曾有の危機を切り抜けれようか。私には、飽食大国の未来図がローマ帝国滅亡と重なり合っているのである。

食べ物を粗末にするのは、生命を大切にしないのと同じである。この一事が万事、人も国も地球をも不幸にしているのである。いま荒廃した日本の改革が叫ばれているが、未曾有の危機を克服するために、一番必要なのは、一粒の米に感謝する「日本の心」を取りもどすことである。私がいま日本と地球の危機を救う「大自然主義」を提唱しているのも、根

本精神は「一粒の米」にあり、その真摯な心から、大自然に帰依する救世の歴史的潮流は始まるのである。

自然に優る師なし。この格言は古今東西、不変の真理であるが、「飽食日本」に最も欠けているのは、自然から学び直すという謙虚で優しい心なのである。

私は「大自然主義の国づくり」を推進するために、「自然敬愛」の全国運動をめざしているが、その行動規範として五力条の「自然敬愛憲章」を起草し、この憲章に基づき、全国の先見性ある地方自治体が、「自然敬愛宣言」の決議へ立ち上がるよう、訴えていくことにしている。

「自然敬愛」を私に悟らせたのは、「七千二百歳の聖樹」縄文杉である。三十五年前、人間に発見されてから縄文杉は三度危機に襲われ、その危機回避に再度尽力した私は、縄文杉と運命的な「樹縁」に結ばれ、以来わが家には、おごそかな霧の中に立つ縄文杉の大き

な写真（50号）が掲げてある。朝に夕に拝礼し、人間が敬う神を超えた「太古の聖樹」を仰いでいると、地球と子孫のために人はどう生きるべきかを、惻々と魂に語りかけるのを覚えるのである。

生かそう「自然敬愛憲章」

「大自然に完全に生命を保護されている人間が、その大恩に背き、地球を危うくするほどの自然破壊を犯しておきながら、今さら自然保護とは人間の思い上がりである。これまでの誤った人間第一から、自然第一の正しい生き方に改め、〈自然敬愛の世紀〉を拓かなくてはならぬ——」

この啓示に基づき「自然敬愛憲章」は生まれたのである。

万葉の昔より自然と共生した日本民族は、危急存亡の今こそ、大自然への報恩に目覚め、挙国一致の「自然敬愛運動」をめざし、「自然敬愛憲章」の精神を貫くべきであろう。

自然敬愛憲章

- 一、生命のみなもと、ふるさとの美しい森や湖、川や渚を大切に守り、私たちの子孫に残すよう努めます。
- 二、自然の素晴らしさ、偉大さ、厳しさを知り、自然に親しみ、自然に学び、自然の恵みに感謝します。
- 三、母なる自然のふところに帰り、真の人間らしさを取り戻し、自然と調和した心豊かな生き方をめざします。
- 四、宇宙に輝く小さな生命の星を慈しみ、限りある地球の資源を大切に使い、もったいないと思う心を持ちます。
- 五、草木をめぐるやさしい気持ちで、人を愛する心や地球愛をはぐくみ、いつまでも平和な世界を實現させます。

縄文杉に捧ぐ

三島昭男・作詞

- 一、霧たちこめる 深山に
ゆるぎなき 縄文杉
太古の姿 いまも残して
見つめつづけた 栄枯の歴史
永遠に守らん 世界の至宝
ああ 高く聖き 神の樹よ
- 二、霊気ただよう 深山に
おごそかな 縄文杉
太古の息吹 いまも伝えて
刻みつづけた 生命の神秘
永遠に崇めん 地球の遺産
ああ 太く聖き 神の樹よ
ああ 縄文杉 とこしえに

法然上人鑽仰会
公開講演会のお知らせ

講師 寺内大吉（大本山増上寺法主 成田有恒台下）

日時 平成14年6月17日（月曜日）午後3時より4時半まで

場所 大本山増上寺三縁ホール（本堂地下一階）

東京都港区芝公園4-7-4

03-3432-1431

地下鉄都営三田線／御成門駅下車徒歩5分

地下鉄都営浅草線・大江戸線／大門駅下車徒歩7分

JR線／浜松町駅下車徒歩10分

定員 250名

会費 会員 無料／一般 千円（当日受付）

法然讃歌

生きるための念仏

講師略歴／なりた・ゆうこう

大本山増上寺第八十七世法主。作家。1921年、東京世田谷の浄土宗大吉寺に生まれる。「はぐれ念仏」で直木賞を受賞。著書に『法然讃歌』（中公新書）、『化城の昭和史』（中公文庫）ほか多数。

「問い合わせ先」

法然上人鑽仰会 講演会係

105-0011 東京都港区芝公園4-7-4

電話 03-3578-6947

ファクス 03-3578-7036

民話

をたずねて

連載

石崎敬子

カエルの上方まいり



昔々、小さな村の小さな川に、一匹のカエルが住んでおったと。

ある日の昼下がりに、カエルが土手にあがって、のんびりと周りを見渡しておると、一人の博労がやってきたと。博労は、馬の背中で揺られながら、気持ち良さそうに馬方節を唄っておったと。

その唄を聞いたカエルは、

「なんてええ声だ。おらもひとつ」

と、ゲゲロ、ゲゲロって唄ってみた。

ところが、調子はずれで、どうもうまくいかん。これでもかと思ひ切り大きな声で唄ってみた。

「誰だつ、邪魔するのは」

せっかく気持ちよく唄っておったのに、と博労は馬を降り、ゲゲロ、ゲゲロと声のする方へ近寄ってみた。

すると、土手の草むらで、一匹のカエルが、大口開けて唄っている。

「なんだ、カエルどのか。いったいここで何しておる」

「博勞どのが、あまりにええ声で唄っておったので、つつい真似をしたと。ところで博勞ど、何処へ出かけるのかね」

「はあ、これから、上方参りに出かけるところさ。そうだ、カエルどの、お前も一緒に行く気はないか」

博勞に誘われ、カエルはしばらく考えておったが、ポンと手を打ち、

「よし、おらもここで上方参りをして、世間を広げてくるとするか」

って、博勞の後をついて行くことに決めた。

博勞が唄いながら、ポッコ、ポッコと馬で行く、その後をカエルがピョコタン、ピョコタンついて行く。疲れてくれば、草むらで休み、疲れが取れば、また歩き出す。こうして二人仲良く、旅しておったと。これまで村の外へ出たことがないカエルは、世間を見る

ことができ、楽しくて仕方がない。見たこともない大きな山を越え、見たこともない長い松並木を通り、これまた見たことのない大きな橋を渡り、ポッコ、ポッコ、ピヨコタン、ピヨコタン、博労とカエルは、やつとのことで上方近くの村までやってきたと。

ところが、馬の後をついて歩くには、カエルはあまりに小さすぎた。カエルの下腹がすれてきて、とうとう跳ねて歩けなくなってしまうと。

「ああ、ここまでやって来たというのに、上方参りをあきらめるのは、なんとしてももったいない」

そうしておるうちにも、博労はどんどん先へ行ってしまった。カエルは、痛む下腹をさすりさすり、どうしたものかと考えた。

「ピヨコタン、ピヨコタン飛び跳ねるから、下腹がすれるに違いない。そうだ、二本の足で歩いてみよう」

カエルは、ひょいと二本の足で立ち上がると、そのままペタペタと歩き出した。



「ほお、これは楽だ。このまま上方まで行こう」

博労に遅れた分を取り返そうと、カエルは急ぎに急いで歩いたところ、ところが、いくら急いで歩いてみても、前を行くはずの博労の姿が、どこにも見あたらん。それでも、そろそろ上方に着くはずだと、なおも急いで歩いたと。

そのうち、見たことのある大きな橋にさしかかったと。

「ほお、世間には、よく似た橋があるもんだな」

カエルは、感心しながらも大きな橋を渡ると、さらには見たことのある長い松並木を通り、これも見たことのある大きな山を越えて行つたと。

すると、小さな村が向こうに見えて来た。

「どうやらあれが、上方のようだな」

やれやれとカエルは、村へ入って行つたと。

ところが、どうも様子がおかしい。話をきいておった町の賑わいも、人通りもまるでなく、田んぼの真ん中に小さな川が一本流れて

おるだけであつた。

「はあ、上方は、なんと懐かしい心地のするところだ。この川も、まるでおらの村の川とそっくりでないか」

不思議な事もあるものよと、周りをよくよく確かめてみると、なんとその川は、カエルが生まれ育つた、あの小さな村の小さな川であつたと。

前だ前だと思い、二本足で歩いておつたが、カエルの目玉は、背中に付いておるから、実は、後ろ向きに歩いておつたというわけさ。

ひざ・ひじ・肩・腰の

関節の痛み、 がまんしていませんか？



全国75万人以上、つらい関節痛でお悩みの方に朗報です。

ひざが痛くなる仕組み



「歩くのがつらい」「正座ができない」「階段の昇り降りがひと苦勞」など、ひざが気になる中高年はたくさんいます。これまで特効薬がないとされてきた関節症ですが、あきらめないでください。いま話題の天然栄養素グルコサミンが、痛みのもとに直接働きかけて、あなたの関節をラクにします。

そしてグルコサミンの決定版といえ

ば、「元氣堂粒」。カニの甲羅から抽出したグルコサミンとサメ軟骨抽出のコンドロイチン、さらに、神経痛などへの効果から「奇跡の貝」と呼ばれている緑イ貝エキスや、理想的なミネラル補給食材として注目の天然成分ドロマイ

トなど配合し、のみやすい粒状にしてあります。まずは30日間、おためしください。

長年のひざの痛みを忘れて、
鼻歌が出るほどうれし!!

痛くて正座できない。そんなとき、ふと目にしたのが「元氣堂粒」の広告でした。のみはじめて2週間目の朝、驚いたことに痛みが消えていたんです。思わず鼻歌が出るほどうれしかった。これは本当にすごいと思いました。



藤本照子さん
(長野県・67歳)



選ぶなら、たしか品質の本物を！
天然の栄養素だから安心です。

●グルコサミンの原料には、山陰を代表する漁業基地・境港で水揚げされた新鮮な日本海産ペニシワイガニを使用。コンドロイチンには宮城県仙沼産の厳選したサメ軟骨を使用しています。高品質をお求めの方には「元氣堂粒」をおすすめします。

■主要成分：グルコサミン塩酸塩/コンドロイチン硫酸/ドロマイト/緑イ貝エキス/大豆イソフラボン/生薑エキス

商品のお申し込みについて (元氣堂本舗からのお知らせ)

げん き どう づぶ
『元氣堂粒』10,000円 (税別)

■ 内容量300mg×300粒・約1ヶ月分

※送料は数量にかかわらず全国一律500円。

※3ピン以上のご購入は10%割引になります。

●商品は1週間前後でお届けいたします。●代金は商品到着後1週間以内に郵便振替でお支払いください。ただし3ピン以上ご購入の際は代金引換でお支払い願います。

●返品は商品到着後8日間以内。ただし送料はお客様ご負担。開封後の返品はご容赦願います。

ご注文は電話かハガキかFAXで



0120-13-8869

受付時間 (年中無休)
午前8時～午後9時

〒105-0003 東京都港区西新橋 2-34-7

(株)元氣堂本舗 浄土係

FAX 03-5777-5149

(24時間受付)

※ハガキまたはファクスでご注文の際は、郵便番号、ご住所(フリガナ)、お名前(フリガナ)、生年月日、性別、ご購入、お電話番号、商品名、数量、ご購入になった雑誌名をご記入ください。

インターネットでもお申し込みになれます。 <http://www.genkidohompo.com/>

たとい一代の法をよくよく学すとも、

一文不知の愚鈍の身になして、(1)

尼入道の無智のともがらに同じうして、(2)

智者のふるまいをせずして、(3)

ただ一向に念仏すべし。

(二枚起請文)

たとえお釈迦さまが生涯をかけてお説きになったみ教えをしつかり学んだとしても、自分はその一説さえも理解できない愚か者と自省し、出家とは名ばかりでただ髪を下ろしただけの人が、仏の教えを学んでいなくても心の底からお念仏を称えているように、決して智慧ある者のふりをせず、ただひたすらお念仏を称えなさい。

私たちの足場

法然上人の教え、思想がもつとも端的、明確に凝縮されているのが『一枚起請文』であることに異論が挟まれる余地はありません。中でもここに掲げた部分分は、「還愚げんぐの念仏」を唱えてやまなかつた上人の心が、最大限に込められている一文と言ってしかるべきです。

この一文がそうした性格である以上、本来ならここに上人の真意を素直にくみとるべきなのですが、一部で「待った!」がかけられているのはよく知られるところです。「尼入道…」の箇所です。

「尼入道の無智のともがら」を単純に「尼入道は無智である」と解釈し、かつ「尼入道Ⅱ女性一般」と置き換えることに起因した、「法然は尼僧さんを、ひいては女性を蔑視していた」とする非難です。

はたして、そうした理解の仕方は本当に的を射ているのか、否か。今、もう一度捉えなおしてみたいと思います。「法然上人の徒であり、その教えを奉ずる私たち」という足場をしっかりと確認した上で。

文章は「釈尊の教えをよく学んだとしても」という仮定を置いた上で、以下(1)(2)(3)と続きます。よく見るとそのそれぞれが「ただ一向に念仏す

べし」にかかっていることがわかります。

(1) と (3) は、仏教を深遠な理論として学ぶを是とし、その理解度が「悟り」に直結する、としていた当時の風潮への警鐘と言えます。とめどなく湧き出る煩惱をいかんともできずにいる自分、その赤裸々な姿を真正面から見据えよ(還愚)、ということでしょう。

さあ、問題視されている(2)です。「尼入道」は「尼」と「入道」の二語、もしくは「尼入道」一語としての二通りに捉えることが可能です。古文には三語いずれも見られるからです。どちらの捉え方を正とするかには様々な見解があります。いくつかの用例を見る限り後者の方が妥当のようです。少なくとも、現実には浮上している女性差別という問題においては、そう捉えることが前提となっているはずです。この場合、「尼入道」は「在家のまま剃髪して仏門に入った女性」の意味で、「尼女房」と同義語として用いられています。

乱世の当時、戦で夫を亡くした女性は無数にいました。その中には自ら髪を下ろして尼僧の姿(尼入道)となり、隠棲して懸命に夫の菩提を弔っていた方が数多くいたことは、諸文献にも明らかです。仏門に入った、とはいっても正

式に得度し専門的に仏教学を学んだわけではありませんから、仏教的知識に深くなかったのは事実でしょう。そうした意味での「無智」なのであって、それをそのまま「尼僧（女性）＝無智」と女性蔑視説に結びつけるのは早計過ぎます。

むしろ「仏教的知識・智慧の有無など仏の前には関係ない。亡夫のため髪を下ろしてまで一途に信仰生活を送る女性―尼入道―の姿勢こそ、念仏者は見習うべきだ」とするのが上人の真意ではなかったでしょうか。でなければ「同じうして」とはならないはずですが、これは、かりに「尼」と「入道」を別語と捉えても言えることです。

「尼入道……」に対する批判が外部からのことならいざしらず、それに同調した声が宗侶のあいだからも聞かれるのは誠に残念なことです。この問題に限らず、経文にしてもご法語にしても「法然上人の徒としての」受け取り方、理解の仕方を深め、それを積極的に啓蒙していくのが私たちの務めとあらためて感じています。

（小村正孝）

長田英樹

健康に人生を送る

十力条・長田流

1. 現代栄養学の矛盾に気づく(栄養過多が病気を
つくっている)

この項は自然農法の創始者が「人間の内臓は栄養の製造工場である」と説かれたものをちょうだいしたものです。わたしが創始者のこの説にふれたのが昭和三八年ですから、かれこれ四〇年間、この説を基準に世の中を見てきたことになります。

平均寿命八〇才と言われる現代、七六才以上の老人はすべて大正生まれで、戦争をはさんだ昭和の前半、貧しい時代を生きた人たちです。彼らの成長期には三度の食事がやつとで、今流にいう栄養を考え、食事などできるものではありませんでした。

わたし自身の少年時代、すなわち食べ盛りは終戦



直後の昭和二〇年代です。秋田県の山村で食糧事情が良かった方だと思いますが、わが家の食事は麦や野菜の入ったご飯とみそ汁が定番で、おかずは毎食つけものと納豆、まれに魚がある程度でした。

中学、高校時代、学校給食などありませんでしたので各自弁当持参。いわゆる「どかべん」に「ごはんをぎゅうぎゅう詰め。おかずは大抵梅干し」コだけ。たまには醤油をしみこませたノリを「ごはんの上に敷いていく程度でしたが、それでもおいしく食べたものです。

昭和三五年、わたしは高校を卒業して海上自衛隊に入隊しました。そこでの食事はわが家に輪をかけたようにお粗末なもの。米少々に麦、外米、人造米

を混合したご飯。おかずは、みそ汁、つけものその他一品。はじめの一週間は大半が残飯となりました。

ところが訓練が厳しくなるにしたがつて食欲旺盛となり、同じ食事内容なのに残飯が皆無の状態となりました。この経験から幼い頃母が教えてくれた「すきつ腹にまさる料理人なし」という教訓を実感したものです。

この古い時代の食事に健康づくりのヒントがあります。ひとことというと「内臓が栄養の製造工場」なのです。牛馬ですら草さえ食んでさえいれば血液ができ、骨が太り毛髪も伸びます。草のどこに血液や骨、毛髪の素があるのでしょうか。万物の霊長といわれるわれわれ人間は、牛馬よりはるかに内臓機能がすぐれているのですから、人間はその民族に与えられた主食を食べていれば健康に生きられる道理です。日本人は穀物と野菜です。主食である米をおいしくいただくために少々のおかずがあればいいのです。

わが国では連日のテレビや新聞が、ビタミンだミネラルだカルシウムだと「栄養」を強調するため、

栄養学を学んだことのない者でさえ「これ栄養があるのよ」と平気で発言する世の中となり、栄養食の代表として食肉がおかずの主流になってきたのです。

子供たちの弁当をのぞいてみると、おかずの方がご飯より多いのがあたり前で、わたしの時代とはまったく異質のものとなっています。それで健康度はどうかというと、われわれの方がはるかにまさっていたように思えます。

「カルシウムが豊富な牛乳を飲めば骨が丈夫になる」とさかんに宣伝されていますが、そんな道理はありません。骨を丈夫にしたかったら太陽の光の下で運動や労働をすることです。特別カルシウムをとったことなどないわたし自身、若い頃から激しいスポーツや労働をしてきたのに、いまだに骨折体験のないことがそれを物語っております。

もし、現代の栄養説が正しければ、これほど病気がふえるはずがありません。ところが栄養を意識すればするほど、病人がふえてきたようにわたしの目には映ります。

梅窓院

今から四年前の平成十年、選択集奉戴八百年を迎えましたが、同年一月より梅窓院の詠唱は歩みだしました。前年梅窓院へ入山した教師二名に詠唱経験があったからです。

八月を除く月二回のお稽古は、近隣と遠方から来寺される講員の時間差を考慮し、茶話会を最初にしました。墓参後、檀家さん同士の交流の場でこれも楽しみの一つとなっております。

増上寺の御忌詠唱奉納大会は詠唱を知って頂く為、最初の年は見学をしました。刺激と感激を受け、翌年には多くの講員が検定を受講し、藤堂ご法主台下から詠唱袈裟を頂戴させていただきました。



普段の練習は椅子席で行っている。

青山
梅窓院

二年目は梅窓院の行事に詠唱を入れまし
た。春彼岸には「月影」施餓鬼には「施餓鬼」
秋彼岸には「彼岸」を奉納いたしました。

入堂・退堂も秋には出来るようになりました。
行事で詠唱をし、同信が増えていくので
有難いことだと思っております。

この年に、増上寺の御忌大会に「月影」を
奉納できたことは一同感激するところでし
た。同年秋、講員の奥様が亡くなられ、講員
一同で「光明摂取」をお唱えするご縁があり
ました。お唱えする誰もが胸に迫り、涙がで
て声にならなかつたのですが、心が一つにな
った瞬間でした。詠唱とは素晴らしい、とい
う感極まった講員の感想や講員以外の方から
も感動され、琴線にふれたような出来事でした。
平成十二年は増上寺の会館建設により詠
唱大会はなく、東京教区は傳通院にて「詠唱
のつどい」に参加させていただきました。

詠唱だけに限らずという事でしたので、梅
窓院は観音札所のご詠歌がありましたので披

平成十四年大本山増上寺御忌での奉納。



露させていただき、以後お寺の行事にも奉納するきっかけとなっておりです。

昨年の冬講員さんから、近隣のお寺でお通夜に詠唱をお唱えしましたという話を伺いました。ご詠歌をしている話をしたら、喪主が身内だった為是非という依頼とご導師のご協力によって、「入堂・光明摂取・退堂」をお唱えして感動されたというのです。

よいことをされましたが、並々ならぬことですから、凄いことだと感心しております。

詠唱の魅力・奥深さ・お念仏のお心が好きな方、詠唱に出会いながら、ご縁がなく最近入会された方など、熱心な講員さんに囲まれ気が引き締まり熱が入ります。

梅窓院の詠唱は始まったばかりで、お伝えしてないすてきな歌がまだ沢山ありますので、気持ちは大きく膨らんでいます。さあこれからも楽しみはいっぱいです。一緒に歩んでまいりましょう。

梅窓院詠唱会 詠唱教司 泉 博美



寺院便り、次回は山形・蟹田寺

なごやかな練習前の茶話会。

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会



〈特選〉

春暮色 呟くごととき 岸辺の灯

河合 千枝

● 岸

「暮れ遅し」という季語のように、春の夕

べはゆつくり暮れてくる。対岸にとり始めた灯を、呟くようにという。「暮れ早し」という冬と比べてみるまでもなく、季節にふさわしい捉え方を感じるだろう。

〈佳作〉

五月雨や岸に寄り添う筏舟

大野 肇

岸の辺を走りし魚影水温む

山口 信子

対岸の街の灯はのと春の雨

池田 伊吹

● 商店

〈特選〉

商店の名入り手ぬぐい 夏来たる

平井美津子

中元の配りものにはよく手ぬぐいが使われた。以前は木綿のものだったが、この頃はもう珍しくなってしまった。それでも私はこの

選者=増田河郎子

〈特選〉

陽炎やバス来て人を攫い行く

島谷ときを

●自由題

手ぬぐいを、あえて木綿と思いたい。そのほうが夏にふさわしいからである。

〈佳作〉

縄のれん替えて居酒屋初夏の風

嶋田喜代子

商店の前賑わいて神輿過ぐ

大場 清

空店舗借りて商う春セーター

井村 善也

〈佳作〉

つながれし馬の眼うるむ桜冷え

藺田 郁子

花見莫塵一枚で足る親子連れ

三ツ橋仁平

客来ると春塵ことのほか目立つ

増田 信子

リアルな句会はいかがでしょう

本誌『浄土』誌上句会に毎月ご投稿いただきまして、まことに有難うございます。

おかげさまで参加下さる方も次第に増え、常連の方々とあわせ、かなりの人数を記録するにいたりました。

さて当欄では、皆様とともに一度、本当の句会を企画したいと考えています。

季節のよい頃を見はからつて、最初はまず東京、大本山増上寺の一隅をお借りするか、その近辺で、と考えておりますが、いかがでしょうか。

桐生の句会の方々、鳥羽の句会の方々は

浄土誌上句会のお知らせ

締切・六月二十日

発表・『浄土』二〇〇二年九月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

◎季節はありません 部屋 自由題

はじめ、遠方の方も多いので場所の設定は難かしいのですが、ご都合のつく方同士、一度集まって、お顔を合わせるのも楽しいことではないでしょうか。

毎月作品だけでおつき合っている者同士が一堂に会し、持ち寄った句を互いに選句し、披露、合評するところを想像してみてください。心があたたまるといいかもしれません。

この件、まだ企画の最初の段階です。

ご意見、ご希望など多数お寄せいただければ幸いです。

開基のお好きな方々へ

寺院御住職、寺庭婦人、あるいは寺族の方々と開基のお好きな（強い？）方をご存知ではありませんか。もちろん御自身でも結構ですが、お知らせいただければ幸いです。

いずれ「浄土・開基大会」（仮称）のようなイベントを企画したいと思っております。できるだけ多く各地の名人、天狗、あるいは開基大好き人間の人口を知りたいと思います。

何卒、編集部まで御一報（できれば葉書にて）いただきたいと思います。

漫画で楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

無為

「むい」と読むこの言葉はいくつもの意味をもっている言葉です。

何もしないという意味で使われるがボビュラーで、よく「人生を無為に過ごさないように」などと使われます。

ですが、仏教用語としては、原因や条件といった因縁なくして生まれたこと、あるいはすべての現象を越えていること、ただひたすら仏道に励むこと、などという意味になります。

興味のある方は少し調べてみると面白いかもしれません。



砲火の下旗を掲げる子供たち 岱潤

今国会で『有事法制』が現実の問題として議論されている。タカ派である小泉内閣の本領発揮といったところだろうか。

しかも『有事』の概念が以前よりも拡大されているようだ。以前であれば我が国が直接攻撃されたときということであったが、今度の条文を見ると、武力攻撃が予測されるに至った事態となっている。これでは確かに野党のいうようにアメリカが起こした軍事行動までもが対象となる。政府のいう有事とは世界中のことだと思えてならない。

武力に対して備えを持つ、あるいは針ねずみの論理ということとは、かなり

前から言われ続けてきた話だ。しかしその考え方自体が間違っていることを声だかに仏教者は言わなくてはならない。「備えあれば憂いなし」の言葉は、護りの準備を固めることであり、外に出て行って喧嘩を賣うことでは決してないはずだ。

昨年の九月十一日以来世界は確かに変わってしまった。強者の一方的論理が当然のように思われるようになってしまった。「非戦—戦争は答ではない」という基本的立場に立ち、武力に対しても武力によらない解決の姿をこれからも見せてゆくことが、現代の仏教者にとつて最も必要な姿だと思うが、違うのであろうか。

(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

村田洋一

佐山哲郎

編集顧問

大室了悟

浄土

六十八巻六月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第二種郵便物認可

印刷 平成十四年五月二十日
発行 平成十四年六月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八 六九四七

FAX 〇三三五七八 七〇三六

振替 〇〇一八〇八八二八七

New & Used Cars
Takata & Co., Ltd.
SINCE 1965

あなたの一台を世界から
ペンツ・ポルシェ・

フェラーリ・ロールスロイス・

国内の各ディーラーにも

在庫の無い車種でも

世界中から輸入しお届け致します。



最新在庫情報をご覧になれます。

<http://www.takataco.jp>
E-mail: union@takataco.jp

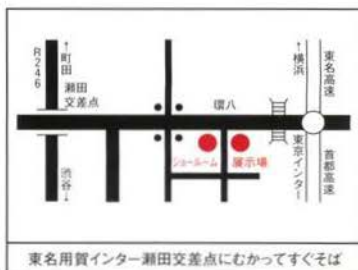
UNION

輸入元(外国自動車輸入協同組合員)
株式会社 高田商会

東京都世田谷区玉川台2-12-1 (〒158-0096)

営業時間：平日／9:30～20:00 日祝／10:00～18:00
定休日／年中無休

☎ **03-3708-1911** FAX.03-3708-2066



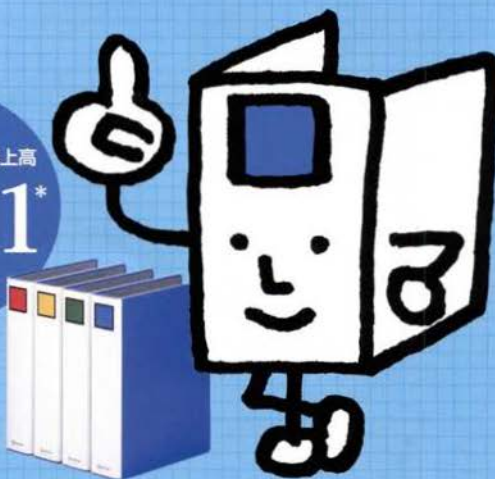
東名用賀インター相模交差点にむかってすぐそば

KING JIM

「グリーン購入法」
適合商品一覧表
ホームページで公開中!

パイプ式ファイル売上高

No.1*



日本中のオフィスで、選ばれ続けてきました。

1954年に日本で初めてパイプ式ファイルを発売して以来、私たちキングジムは、延べ3億冊のファイルを世に送り出してきました。どの職場でも、必ず見かける■マークのファイル。その名前は知らなくても、カタチを見ればきっと、「あっ、あのファイルね」と思われることでしょう。そしていつのまにか、キングジムのファイルはお客様の間で「キングファイル」という愛称で呼ばれるまでになりました。そこで私たちは、このニックネームを大事にしようと考え、当社のパイプ式ファイルの名前を「キングファイル」に統一することにいたしました。日本全国の職場、ビジネスマンやOLのみならず愛用されて、3億冊。これからは、■マークの「キングファイル」とお呼びください。

*パイプ式ファイル売上高：実数経銷研究開発

日本のスタンダードファイル
キングファイル



ISO 14001
JSA (ENV) 9001
つくりとく



ISO 9001
JSA (QMS) 9001
つくりとく